第２章

京都のなかの岡崎

本章の目的は，岡崎の地域史ないし都市史を読み解くことによって文化的景観としての岡崎の特色を明らかにすることである。以下，第１節では平安京・京都の周縁地域の一つである岡崎を「景勝ヒンターランド」（後背地）として捉え直し，第２節では「景勝ヒンターランド」岡崎の都市史的な動向を岡崎の場所性・重層性・象徴性などに留意しつつ検討し，最後の第３節では岡崎の文化的景観の特色を指摘することにしたい。

第１節　平安京・京都と周縁地域

平安京から京都へ，古都から現代都市へ発展することができた大きな要因に京の町々を取り囲む豊かな自然があることは，しばしば指摘されるとおりである。本節では平安京・京都とその周囲に拡がる地域との関係を捉えるため，最初に平安京と周囲の山々の関係，ついで平安京・京都と周縁地域との関係，さらに平安京の変容と京都の展開につれて転変する周縁地域の姿を検証する。

１.平安京と山並み

（１）　山並みの美

延暦 13 年（794）の平安京遷都の詔に，「葛野の大宮の地は，山川もうるわしく，四方の国の百姓の参出来ることも便にして」とあり[1]，遷都の理由として自然の景勝の地であること，交通の便がよいことをあげている。また翌 11 月 28 日の詔では「此の国，山河襟帯，自然に城を作す，この形勝によりて新号を制すべし」とあって[2]，山々が城壁のように京を取り囲む自然の形象を理由として山背国から山城国へと改称したことがわかる。

さらに，翌年正月 16 日の踏歌に「山河，美をほしいままにして四周に連なる」とあるのも[3]，平安京ないし都城選地の思想と山河との関係を考える手がかりとなる。京を囲む山並みと川の流れのうるわしさを選地の大きな理由としているのであろう。このような考え方の萌芽は，「久迩の新しき京を讃むる歌」（『万葉集』巻 6-1050）に「山並の宜しき国と　川波の立ち合う郷と」とあり，また大伴家持の歌（『万葉集』巻 6-1037）に，「今造る　久迩の都は　山川の　清けき見れば　うべ知らすべし」とあるように，すでに恭仁京遷都の時点であらわれていたのであるが，都城をめぐる自然を美の対象として捉え，選地の理由の表面に据えているところに新鮮さがある。

山川のうるわしさという新たな条件は，平城京遷都に際して明示された四神相応や三山の鎮め，亀筮の占いなどの要件も当然のこととして満たしたうえのことであったにちがいない。つまり都城の選地において新たな選地思想が積み重ねられたのであり，これを平安京の選地思想における大きな特質としてよかろう。

延暦 17 年（798）の太政官符には「其京城側近の高顕の山野，常に衛府をして守らしめ，行幸の経過に及び山岡を顕望す，旧に依り改めず，斫損せしむ莫れ，此等の山野並びに具さに四至を録し，牓示を分明し，此に因り濫に遠所に及ぶことを得ず」とある[4]。京周辺の山野，というよりも山・岡の風致・景観を保持することを定めた政策が，おそらく遷都前後から施行されており，その伝統を継承して一定の範囲を限って踏襲することを決めたものである。

これは，山野の眺望を重視していること，とりわけ平安宮から出て大路を行幸するときの眺望であるので，道路からの山並み景観，いいかえれば道路から見える山並みのスカイラインやヴィスタを問題としていることが大いに注目される。もちろん視線は天皇のものであるが，しかし，山並みのスカイラインやヴィスタは，平安京の住人すべてが共有することができた。保全すべき山野の指定とその範囲の登録など，いわゆる古都保存法の先例ともいえようか。周辺の山林の木を伐ることは民衆の日常生活にとって不可欠であり，じっさ

いにどの程度の効果をおさめたのか不明であるが，都市周辺の山並みの眺望という新しい視点から打ち出された，平安初期の自然風致の保全政策として注目すべきであろう。

（２）　平安京三山，そして京都三山へ
―山並みの重層性

東の吉田山（標高 102.6 m），北の船岡山（標高 112 m），西の双ヶ丘（標高 116 m）は，いずれも高さ 100 mほどの岡であるが，東の大文字山や西の左大文字山などの山地と同じ秩父古生層の山であり，「孤立丘陵として湖盆に島をなして浮かんでいた」という。 大阪湾から海水が入ってきていた太古の時代には，孤立した丘陵である船岡山や双ヶ丘，神楽岡は海上に浮かぶ島であったようである。いかにも神仙思想の三神仙島を思い起こさせるイメージであり，始原的・幻想的な風景として興味深い。

吉田山・船岡山・双ヶ丘の三山は，もともとの名（神楽岡・船岡・双岡）が示すように岡とみなされていたが，平安宮や平安京を囲繞するそれらは，よく似た景観的特徴と「三山が鎮めをなす」機能をもつ藤原京の三山（耳成山・畝傍山・香具山の大和三山）や平城京の三山[5]にならって，平安京三山と呼ぶのが相応しい。

平安京三山は平安京の立地とも深い関わりをもっているとされる。船岡を通る南北線と平安京の都市軸である朱雀大路が一致し，神楽岡と双岡を結ぶ東西線と平安京の北の京極大路（今の一条通り）が一致するというのである。

平安京と周囲の山並みの関係は，時代とともに深みを増し，中世末には祖先の霊などを祀るお盆の送り火の山々，すなわち大文字山（466 m），松ヶ崎西山・東山（妙・法），左大文字山，船山（舟形），曼荼羅山（鳥居形）などがあらわれ，近代になって遠く如意ヶ嶽や比叡山，鞍馬山，愛宕山などが周囲の山並みとともに東山・北山・西山，そして京都三山となる。平安京・京都をめぐる山並みは，その歴史を重層化しつつ同心円状に広がり，景観的には近景・中景そして遠景をなしているということができる[6]。

2. 平安京・京都と周縁地域

ところで，日本の都市は周囲の農村から隔離されることはなく，それらに対する開放性，連続性ともいうべき特質を備えている[7]。条坊制によって綿密に計画，施工された平安京の街路網はやがて京域を越えて近郊地域にまで延伸し，それらは「末」を付加して二条大路末などと呼ばれた。都市壁をもたず，道を介して周縁地域に連続する開放的な都市平安京・京都は，都市民や周辺住民などのさまざまな活動に応じて拡大し縮小することになる。

平安京は，その建設当初から理念・計画としての平安京と，現実の都市空間としての平安京とのあいだに大きな乖離が存在した。それは，明確な計画にもとづいて平安京が建設されたにもかかわらず，実際には京の西南隅の部分では街路が建設されず，都市建設は全体として未完成のままであったからである。さらに，もともと都城は宮と京というまったく異なる構成原理をもつ空間が一体化し，他から隔絶されたものであるが，永遠の都と位置づけられた平安京は，９世紀以降そうした都城制の理念と実体がしだいに崩れていき，「京都」という固有の名で呼ばれる中世的な都市へ変容を遂げた。「京都」の範囲は，五位以上の王族や貴族の「京都」居住を義務化した寛平７年（895）の法に，「東は会坂（逢坂）関，南は山崎・与渡（淀）の辺り，西は摂津・丹波との境，北は大兄山」となっているという[8]。ここで興味深い点は，「京都」の範囲が平安京域に限られておらず，周囲の自然を含んだはるかに広い地域を都市的な領域としていることである。現在，常識的に「京都」という場合，東は東山，北は北山，西は西山，南は淀にいたる地域をさすようであるが，その概念よりもかなり広い。現代的ともいえる地域概念が，９世紀末には成立していたことがわかる。

「京都」は，平安京を意味する場合と，東山・北山・西山などに囲まれた広い地域を意味する場合と二重の意味をもった。平安京・京都という観念，京中・京外あるいは洛中・洛外という観念は，平安京の理念と現実，京都の両義性，その都市活動と都市域の広がりとのあいだでゆれうごくことになった。こうした点が一元的・統一的な中国や朝鮮半島の城郭都市との大きなちがいであろう。

中世の京都は，公武寺社権門が相互に補完し合いながら権力を分有する都市であり，その拠点もそれぞれ京中（洛中）と京外（洛外）に建設された。京都の実体は朝廷・幕府の拠点都市である洛中と，寺社権門（荘園領主）の門前都市が散在する洛外からなっているのである。幕府は洛中を直接支配するが，洛外は寺社を介した間接的な支配にとどまった。このように京都はある意味で散在的，多元的な構造をもっており，大陸の都市と比較してあえていうならば村落的な都市と表現しても誤りではあるまい。村落的な都市である京都は自然を克服したり，対立したりすることはなく，自然と共存しているのである。自然のなかにたたずむ山麓の寺社や住宅などの姿が如実に示すように，自然との融和は京都の特質の一つともなっている。

京都という複合的，重層的な構造をもった都市では，周縁地域が重要な役割を果たしていた。中世を例に簡単に述べると，「洛中」と「洛外」の境界をなす周縁地域においては，農家風の町家や町家風の農家が混在し，町 → 半村･半町 → 農村，すなわち都市から農村へ，中心から周縁へと緩やかに変化していたであろう。戦国期の洛中洛外図屏風（国立歴史民俗博物館所蔵甲本，16 世紀半ば）の「西の京」の集落をみると，「構」のなかにある民家は，いずれも草葺の農家風であるが，農家本来の姿というべき屋敷型ではなく，町家と同じ型の，道に直面する住居である。周縁に両義的な領域が広汎に存在するこうしたありかたこそ，おそらく室町期京都の巨大さの実体であり，大きな都市的特性といえる。

３. 平安京周縁地域の構造変化

京都盆地北部は葛野郡・愛宕郡・紀伊郡・乙訓郡などがあり，いくつもの河川がながれ，水田や畠が広がり，古くからの農村集落が散在するなど，地方のありふれた田園景観を呈していた。そうした姿を大きく変える契機となったのが首都・平安京の建設であった。延暦 13 年（794）の平安京遷都そしてその後の都市化の進行とともに，周縁地域はしだいに都市近郊農村へと性格を変えていった。前述のように寛平７年（895）に貴族の居住すべき「京都」として，「東は逢坂関，南は山崎・淀の辺り，西は摂津・丹波との境，北は大兄山」の範囲が定められた。平安京の周縁地域は，「京中」に対する「京外」，平安京の都市圏・首都圏を構成する「後背地」として位置づけされることになったのである。

都市の後背地（ヒンターランド hinterland）というと，通常は経済的・社会的機能が及ぶ地域を意味するのであるが，平安京周縁地域「京外」の場合はそれらに加えて，さらに政治的・文化的・宗教的影響が及んでいる。そこにヒンターランドとしての「京外」の大きな特徴を認めることができる。

平安京の周縁地域は，四周が同時に都市的なヒンターランドとなったのではなく，歴史的にいくつかの段階を追っている。最初に都市化を遂げたのは平安京北辺（一条北辺）の地域であり，かなり早く平安中期からスプロールが始まったようである。京内の南北道路が北に延びるとともに武者小路・北小路・今小路・五辻などの東西の道路が開かれ，また方格地割が敷かれて上層貴族の邸宅，寺院，庶民の住宅が営まれた。ついで左京の発展にともなって東西の条坊道路は東京極大路を越えて延び，鴨川との間に「東朱雀」や「堤」などの南北の道が開通した。藤原兼家の法興院や道長の法成寺などが建てられ，また「東朱雀」を中軸として鴨川沿いに市街地が発達した。東西道路は京域を越え，さらに鴨川を越えて東進し，院政期には鴨東白河にも条坊制による方格状市街地が形成されることになった。その後，鳥羽，東山七条，六波羅の地域が，鎌倉時代になると洛西の嵯峨が，近世初頭には洛南の伏見が都市的大発展を遂げた。

一条北辺地域は，「京中」と連続する市街地を形成し，厳密に「平安京」を解釈する例外的な場合を除いて「京中」とみなされていたし，室町期以降は「上京」の中心部を占めることになる。また「京・白河」，「洛中・嵯峨」，「京・伏見」などと並称される都市域が周縁地域に形成されたことは，平安京・京都の都市的な発展と同時に，ヒンターランドの分節化，地域中心市街地の形成を端的に物語るものであろう。

これらのヒンターランドは，いうまでもなく平安京・京都の政治的・経済的・社会的・文化的・宗教的な影響が強く及ぶ地域であったが，その歴

史が明確に示すように受け身に終始するヒンターランドであったのではなく，平安京・京都を政治的・経済的・社会的・文化的・宗教的に支えるヒンターランドであったこと，いいかえれば首都機能を補完する地域であったことが注目されよう。平安京・京都の周縁地域はとくに白河がそうであったように，平安京・京都と栄枯盛衰をともにするヒンターランドであったといってもよい。

平安京・京都の周縁地域については固有の地域的な特色として，①離宮や別業が造営された自然の景勝の地であること，②交通の要衝であること，などの点を挙げることができよう。有名な景勝の地であることが地域形成に大きな契機となったことに着目して，これらを「景勝ヒンターランド」・「景勝後背地」とよぶのが相応しい。

第２節　「景勝ヒンターランド」岡崎 ―場所性・重層性・象徴性

鴨川東岸から京都盆地東方の山麓部にかけての一帯が「東山」であり，白川の流域一帯の地域名である「白川（白河）」も時には東山と同じ意味で用いられることがあった。この東山・白河地域には古くは愛宕郡の蓼倉・栗野・出雲郷・粟田（上・下）・八坂・鳥戸・愛宕などの郷があった。その中心部にあって，東国と結ぶ交通の要衝そして別業の営まれる景勝の地が白河（狭義）あるいは岡崎である（岡崎という地名は平安時代末期には使われていたようである）。後述するように,「京中」・「洛中」の東に位置する白河＝岡崎地域は都心部と相互作用・補完関係にあり，隆盛と衰微など運命をともにした。岡崎の景観や住居の様式，生業などは，平安京・京都の発展あるいは衰退にあわせて，〈都市〉と〈農村〉のあいだで揺れ動いたのである。

本節では，そうした「景勝ヒンターランド」岡崎の転変する姿，そして岡崎の場所性・重層性・象徴性などについて検討することにしよう。

１.平安京の都市化と別業の開発―前史

平安京遷都後まもない頃からこの地域にはいくつもの別業が営まれた。坂上田村麻呂の粟田別業や[9]，藤原関雄の東山山荘[10]，藤原基経の山荘粟田院[11]，藤原道兼の粟田殿[12]，藤原頼通が伝領した藤原家累代の別業白河殿[13]などはよく知られている。

別荘から寺院への機能転換が早い時期にみられることも興味深い。東山山麓の景勝地は寺院にとっても適地なのであって，仁寿３年（853）には藤原関雄の東山山荘を買得して禅林寺（永観堂）が創始されている。永観堂の紅葉を「岩垣もみじ」というのは，東山の「山里」に隠れ住んだ関雄が詠んだ歌に由来するが，それはまた土地の歴史を伝えているのである。

２.院政と「副都心」白河の形成

承保２年（1075）には頼通の白河殿を寺地として白河天皇による法勝寺の造営が始まった。法勝寺は，このあと続いて白河の地に建設された寺院，いわゆる六勝寺――法勝寺・尊勝寺・最勝寺・成勝寺・延勝寺・円勝寺――の最初で，しかも最大規模の寺院であった。伽藍の規模や構成についてはいくつかの説があるが，敷地はおよそ東西二町，南北二～三町を占め，主な建築は敷地の南北中心軸線上に南から北へ，重層の南大門，八角九重塔，金堂，講堂，薬師堂が並びたっていた。奈良時代の東大寺大仏殿に次ぐ大きさといってよい巨大な金堂そして広大な苑池の中島に聳え立つ高さ27丈（約81m）の八角九重塔が，密教の両界曼陀羅の世界とともに白河上皇の院政権力を象徴していた。なお，法勝寺の占地には，平城京や平安京と同じく「四神相応」の観念が認められること，つまり自然との関係に配慮していること，また平城京と東大寺（聖武天皇の創建した総国分寺）の位置関係を継承していること（二条大路の末に西大門が立つことなど），いわば古代的な都市と国家と寺院のイメージを継承していることなども注目される。

二条大路末の白河の地には六勝寺のほかにも得長寿院・蓮華蔵院・金剛勝院・証菩提院などの寺院が創建され，また白河上皇の院御所である白河殿や貴族の邸宅が構えられた。当然のことながらそれまでの条里制地割の上に「今朱雀」すなわち都市軸をともなう条坊制街区が造成されていた。こうして法勝寺と白河殿を中心に「京・白河」と並称される地域，いわば京を補完する「副都心」が発展した。

この地域には鴨川近くの白河殿と東端に位置する法勝寺のあいだに数多くの寺院群が並び立っていて，大は八角九重塔から小は三重塔まで多数の塔が林立する景観が印象的であったにちがいない。当時の貴族のあいだには「延齢之祈祷」として京の内外にある塔に参詣する「百塔詣」が流行っ

ていたようであり，中山忠親は治承３年（1179）２月の23日からの３日間で合計128基の塔に参詣したことを日記『山槐記』に記している。これらの塔のなかで最大にして最高の塔である法勝寺八角九重塔は，ランドマークであることは当然のこととして密教の金剛界曼荼羅の世界や院政政権の権威のみならず，長寿延命への期待なども象徴していたにちがいない。

3. 中世京都と岡崎の近郊農村化

平安時代末には東山の七条辺りに後白河法皇の法住寺殿や蓮華王院（三十三間堂）などが営まれ，またその北方の六波羅の地に平清盛の六波羅泉殿を初めとする平氏一門の屋敷が甍を並べた。後白河院政と平氏政権の洛外拠点として活況を呈したのが東山七条と六波羅であった。

鎌倉幕府が成立すると，鎌倉と結ぶ東海道の出入り口となる岡崎周辺は交通の要衝としてより重要性が増した。また13世紀末，正応４年（1291）には亀山天皇が離宮である禅林寺殿を改めて禅宗の南禅寺を創建したが，南禅寺は京への入り口を防御する機能を担ったと考えられている。

一方，六波羅は，鎌倉幕府によって六波羅探題などが設置され，京都における拠点の一つと位置づけられた。「東山」という周縁地域にとっては権力拠点が北の白河から南の六波羅へ移動したにすぎないともいえるが，白河の地にとって副都心としての機能を喪失したその影響はきわめて大きかった。

源頼朝は罹災した法勝寺の復興を支援したが，本来の庇護者を失った六勝寺は鎌倉時代末から南北朝期にかけてしだいに衰退・荒廃することになった。最大の威容を誇った法勝寺の伽藍に壊滅的な打撃を与えたのは暦応５年（1342）３月20日の大火災であり，八角九重塔や阿弥陀堂とともに創建以来の金堂も焼け落ちてしまい，その後再建されることはなかった。白河は宗教的・地域的なシンボルも無くしたのである。

室町時代の初期には幕府の所在地は一定しなかったが，三代義満のときから室町殿（花御所，北方の周縁地域である一条北辺に所在する）に定まった。この地域は持明院統の拠点である持明院殿や院御所の営まれた地域であることに留意しておきたい。さらに，室町幕府は東方の白河ではなく，西方の周縁地域，すなわち嵯峨を重視し，天龍寺や宝幢寺などを造営するなど「朱雀」を都市軸とした新たな宗教都市をつくりだした。「洛中・嵯峨」と併称されたように，嵯峨はかつての白河にとってかわる新都市として発展した。

この時代の京都は多核複合都市（脇田晴子）とも，巨大都市コンプレックス（山田邦和）とも理解されているが，どちらも洛外の都市と洛中との連携に注目する見かたといえよう。周縁地域のもつ都市・農村の両義的な性格に配慮して，都市間のネットワークにとどまらず，周縁の農村地域をも包含した都市京都のありかたを考えることが重要であろう。

さて，白河に最後のとどめを刺したのが応仁の乱であり，最勝寺・成勝寺・延勝寺などが廃絶したと伝える（尊勝寺の廃絶も同じ頃か）。法勝寺と円勝寺が16世紀半ばの永禄４年（1561）まで存続していたこと[14]，さらに永禄６年（1563）においても法勝寺の寺内には「寮舎」などの建物がわずかに残っていたことがわかるが[15]，かつての大伽藍は地震・落雷などの自然災害や戦災・火事などの人災によって荒廃し，見る影もない姿となっていた。

それは白河・岡崎の地域も同様であり，「京・白河」と並び称された繁華な町並みや条坊制市街地も戦国期には農村集落や田畑へと景観的・機能的・社会的・構造的な転換を遂げていたと考えられる。16世紀初頭には近郊農村連合ともいうべき「東山十郷」―岡崎・聖護院・粟田口・南禅寺門前・鹿谷・若王子・白川（北白川）・浄土寺・田中・吉田の十郷―が成立していたが[16]，このことは岡崎の都市から農村への質的転換を端的に示している。ただ，交通の要衝であり，風光明媚な土地であるという地理的条件は変わっていないから，純然たる農村地域というわけではなかったに違いない。天文５年（1536），南禅寺門前に足利義晴の御所が造営されたことはそうした状況を示唆していよう[17]。

４.近世京都の発展と岡崎の大規模新地開発

天下統一を果たした豊臣秀吉は，天正14年（1586）から京中大内裏跡に聚楽第を造営し，また文禄４年（1595）に東山の七条辺りに東大寺大仏殿に匹敵する壮大な規模の大仏殿方広寺を建立したが，東山の地域を洛外拠点とはしなかった。晩年の秀吉は甥の秀次に関白職を譲り，天正20年（1592）伏見指月の地において隠居城の造営に着工した。京の南の周縁地域である伏見は平安時代以来，橘俊綱の伏見山荘や伏見殿などが営まれるなど，巨椋池を臨む風光明媚な景勝の地として知られていた。

しかし文禄２年（1593）秀頼の誕生によって情勢は一変し，権力を取り戻した秀吉は，同年末には本格的な天下支配の城郭として伏見指月城とその城下町の建設を決定した。翌文禄３年（1594）８月に秀吉は指月の城に入り，ここに伏見の城下は首都といってもよいような状況となった。

さて，近世岡崎村の地は織豊政権に注目されることはなかったし，それは徳川幕府においても同様であったが，江戸幕府の成立によって東海道の重要性が増大し，交通の要衝としての地位は高まった。戦国期とかわらず近郊農村の一つにすぎない岡崎に宗教的色彩を付加することになったのが，袋中上人が慶長16年（1611）に再興した浄土宗檀王法林寺（鴨川以東，三条以北）である。

洛中に近い岡崎の地域には寺地や屋敷地などに転換できる畠地，いわば市街化に対応できる空閑地が大量に存在したが，寛文９年（1669）から同10年にかけていわゆる「寛文の新堤」が築造されたことは，その後の都市的展開の大きな要因となったと考えられる。寛文13年（1673）の禁裏大火後，当地に日蓮宗頂妙寺（鴨川以東，二条以南）が移転させられたのはそうした立地条件の改善があったからなのであろう。

延宝２年（1674）の「四方洛外町続之町々小名之覚」には，「二条東堤，但三条法林寺境迄四町ニ而御座候得共，未町小名宛不申候，未家建致不申候ニ付，町数書付不申候」とあり[18]，延宝２年には鴨川東堤に沿って二条から三条に至る４町の町立がすでになされていた。法林寺の北に位置し，４町の一つと考えられる孫橋町は，寛文９年（1669）に岡崎村の耕地を町地としたというから[19]，４町は寛文の新堤の竣工後まもなく町地として赦免されたと考えてよい。しかし，延宝２年になってもまだ町名が定められていないし，家屋も建てられていないという状況であった。孫橋町などの町々が姿を現すのは，すなわち岡崎村の市街化の進行は延宝期より後のことであり，17世紀末，遅くとも宝永５年（1708）の「二条川東」の開発以前と考えられる。なお法林寺の東に心光寺が移転してきたのは貞享２年（1685）以前のことである。

宝永５年の京中大火は岡崎村にも大きな変化をもたらした。焼失した禁裏の南の町々と多数の寺院が，禁裏拡張のあおりを受けて鴨川以東，二条以南，三条以北の地域に集団移転してきたからである[20]。大量の空閑地を有する岡崎村は京中の大火復興都市計画にともなう立ち退き地域を吸収するバッファゾーンの役割を果たすことになったのである。新たに開発された町々は西北の頂妙寺，西南の檀王法林寺，そして東方の寺院街で囲まれたブロックの中央部を占め，「富小路通」や「車屋町通」など旧地に因んで名付けられた数本の南北通りが走り，南北に細長い町割を形成している。条坊制の街区とも，また近世初頭に町人によって開発された新在家絹屋町や島原の東西に長い街区とも異なり，いわば従前からの伝統的な街区形態がそのまま踏襲されたといえよう。

その後しばらくして享保19年（1734）に「二条川東」の北方の畠地（聖護院村に属する）に，旅籠屋や茶屋などの営業が許可された「二条新地」が開発された。「二条川東」や「二条新地」は近世中期の京都における大規模新地開発の好例といってよいと思われるが，そうした結果，岡崎地域はそれぞれ特徴のある「二条川東」や「二条新地」という大きな都市域を抱え込むことになった。久方ぶりに町並み，歓楽街，寺院街など都市性を回復したといってよいであろう。

５.「京都」でなくなった京都の近代化を支える岡崎

幕末の動乱期には京都が政治活動の中心となり，岡崎の地域にも彦根・阿波・安芸・越前・加賀などの大規模な藩邸が造られ，耕作地から武家屋敷へと地域景観が一変した。京中における諸藩の活動を支援する場所として新たな都市的機能を担うようになったのである。しかしながら，それはきわめて短期間で終わることになった。慶応３年（1867）の大政奉還と王政復古の号令によって皇居は二条城に移され，京都で維新政府の首都建設がなされるかのように思われたが，明治２年（1869）東京への遷都が決定され，京都は首都･「京都」ではなくなったのである。岡崎の藩邸群もまた廃絶してふたたび広大な空閑地と化した。

明治維新とくに東京遷都は，1100 年にわたって首都であった京都にとりわけ大きな負の影響を与えた。しかし，こうした逆境のなかでさまざま改革がなされ，古都京都は近代都市京都へと変貌していったのである。

京都の近代化は，明治元年（1868）から 14 年（1881）の第Ⅰ期，14 年から 28 年（1895）の第Ⅱ期，28 年から大正年間までの第Ⅲ期という３段階にわたって行われた。まず第Ⅰ期には，欧米の新技術を取り入れて勧業政策がとられた。四辻の木戸門を撤去して道路整備を行ない，学区制の導入によって地域を再編成し，新京極を開通した。第Ⅱ期には琵琶湖疏水が建設され，運輸・動力を向上させるとともに，蹴上発電を設けて産業動力の電化を進め，日本最初の路面電車を運行した。この時期の明治 28 年（1895）に平安建都 1100 年を記念して特別に岡崎を舞台に第４回内国勧業博覧会が開催され，全国からの募金によって平安宮の朝堂院を模倣した平安神宮が建設された。第Ⅲ期の政策は「三大事業」といわれ，道路拡張・電鉄敷設，上水道建設，第二疏水建設が行われた。

これらからわかるように京都の近代化と岡崎の動向は一体の関係にあり，近代化を追求する京都が必要とする都市機能や発展の契機，場所を提供したといえよう。

岡崎における近代工業地開発，また疏水を利用した「近代和風」の住宅・別荘と庭園の建設については他の章で詳述されるので，ここでは琵琶湖疏水や平安神宮などが当初に想定されていた役割を果たし終えたあとも生き続け，京都の近代化を象徴するすぐれた文化遺産となっていることを指摘しておきたい。平安神宮の大極殿や應天門・蒼龍楼・白虎楼などは平成 22 年に重要文化財に指定され，その北西の地に明治 32 年（1899）建立された武徳殿は平成８年に同じく重要文化財に指定されている。平安宮の朝堂院とその北西の宴の松原に立つ武徳殿を思い起こさせる平安神宮と旧武徳殿（現在の京都市武道センター）は，平安京･京都のはじまり，そして京都の復興と再生を象徴しているともいえよう。

第３節　京都岡崎の文化的景観

１.文化的景観としての特質

京都岡崎の文化的景観についてその特質を簡潔に整理してみよう。

（１）　場所性

①自然の景勝の地である。

②交通の要衝である。

③平安京・京都のヒンターランド（後背地）として，経済的･社会的機能のほか，さらに政治的･文化的・宗教的影響が及んでいる。

④京都の「近代化」をもたらし，またその復興と再生を支える「景勝ヒンターランド」である。現代において岡崎が「伝統と進取の地」といわれることと不可分の関係にある。

（２）　重層性

①自然：東山，鴨川・白川 → 東山，鴨川・白川，琵琶湖疏水

②周縁地域：蔬菜栽培→ 近代工業・伝統産業

③景勝地：貴族の別業→ 近代和風別荘群

④副都心：六勝寺，白河殿→ 近代の大規模開発，文化・観光・宗教施設の立地。

⑤空間構造：条里制地割，条坊制地割，中近世の地割，近代道路網が重層，残存している。

岡崎は，景勝地そして副都心としての白河の遺伝子を受け継いでいる。

（３）　象徴性

①六勝寺跡や藩邸跡に形成された文化・観光地区岡崎は，古都京都の復興･再生を象徴している。

②平安京や大内裏を思い起こさせる平安神宮は，京都のはじまり，そして京都の復興と再生を象徴している。

③高さ 80 m を超える法勝寺八角九重塔の特異な基礎地業の上に動物園の観覧車が建っていることは興味深い。

２.文化的景観としての価値評価

こうした特徴を持つ岡崎の文化的景観について，あえて価値評価を行うなら次のようになるであろう。

①京都岡崎の市街地は，平安京遷都を契機として首都の近郊農村となり，11 世紀末に形成された平安京の「外京」ともいうべき条坊制市街地，白河を基盤とする。

②白河市街地の形態と景観は考古学，歴史学，都市史学，建築史学の成果によってほぼ判明しており，その後の変遷，景観形成についても戦国期の洛中洛外図屏風や近世・近代に版行された多くの地図類において確認することができる。

③東山，鴨川，白川と近代の琵琶湖疏水，また方格状地割が，岡崎の市街地の街路および街区の構造を決定している。

④自然はもとより平安京・京都の栄枯盛衰と深くかかわり織りなされた歴史と文化，人々の生活と生業が一体となって現在の社会的・空間的な特色がつくり出されている。

以上のように，京都岡崎の文化的景観は，わが国における首都の発展の各段階を投影した都市構造を現在まで継承し，山並みや河川を基盤に疎水，街路網などの諸要素が現在の都市景観に反映されるとともに，京中・京外，また洛中・洛外が醸成した伝統と文化に基づく社寺や和風住宅群が独特の界隈を生みだす貴重な文化的景観であるといえよう。　（髙橋　康夫）

註

１）『日本紀略』延暦 13 年（794）10 月 28 日条。
２）『日本紀略』延暦 13 年（794）11 月８日条。
３）『日本紀略』延暦 15 年（796）正月 16 日条，『類聚国史』72，踏歌。
４）『類聚三代格』巻 16，延暦 17 年（798）12 月８日付。
５）平城京遷都の詔において「鎮めをなす」とされた三山が具体的にどれを指すかについては，北の「平城天皇陵」（もとは市庭古墳と呼ばれた前方後円墳であり，平城宮造営工事により前方部が破壊された），東の御蓋山（春日山，春日大社の神奈備山），西の「垂仁陵」とされる巨大な前方後円墳とする説など，いくつかある。
６）この項については拙稿「京都と山並み―居住環境史の一素描」（髙橋康夫・宮本雅明・伊藤毅・吉田伸之編『図集・日本都市史』，東京大学出版会，1993 年，294 ～ 307 頁）を参照いただければ幸いである。
７）こうした特性は近世における都市の発展を示す「町続町」という言葉によく表れている。
８）保立道久『平安王朝』，岩波書店，1996 年，58 頁。『類聚三代格』所収 寛平７年（895 年）12 月３日付太政官符。
９）『日本後紀』弘仁２年（811）５月 23 日条。
10）『文徳実録』仁寿３年（853）２月 14 日条
11）『三代実録』元慶３年（879）５月４日条。
12）『栄花物語』巻５。
13）「法勝寺金堂造営記」（『続群書類従 27 上　釈家部』）。
14）「別本賦引付三」（桑山浩然編『室町幕府引付史料集成』上巻，近藤出版社，1980 年）。
15）今谷明・髙橋康夫編『室町幕府文書集成』室町幕府奉行人奉書篇，3897 号，1986 年。
16）永正２年（1505）の室町幕府奉行人奉書に「東山十郷々人等中」とある（『室町幕府文書集成』室町幕府奉行人奉書篇，2408 号，1986 年）。十郷の構成について，田中克行「村の『半済』と戦乱・徳政一揆――戦国期京都近郊村落の連帯と武力動員」（『史学雑誌』102-6，1993 年，1099 ～ 1134 頁）は，聖護院・岡崎・南禅寺・粟田口・鹿ヶ谷・浄土寺・白川・田中・吉田の九郷を挙げ，十郷ではなく，九郷であった可能性を示すが，それは天文 15 年（1546）の東山十郷内地下人申状（「徳政賦引付」，『室町幕府引付史料集成』下巻）に，「東山十郷内《粟田口　岡崎　聖護院　鹿谷　同若王子》」とある鹿ヶ谷の若王子を，「同」と表記されていることから「鹿谷」郷から完全に独立していないとみたからであった。しかし，「鹿谷」は郷名であると同時に広域地名でもあるので，若王子を十郷の一つとみなすことができると思われる。また同じ天文 15 年と推定される関係史料に「東山粟田口・同岡崎・聖護院・鹿谷・若王子地下人等」（『室町幕府文書集成』室町幕府奉行人奉書篇 3640 号，1986 年）とあり，「鹿谷」と「若王子」はそれぞれ一つの独立した郷であると解したほ うがよい。
17）『厳助往年記』天文５年（1536）４月条。
18）「荻野家文書」（参考文献３「法林寺門前町」の項）。
19）参考文献３「孫橋町」の項。
20）詳細は，鎌田道隆「近世都市における都市開発―宝永五年京都大火後の新地形成をめぐって」，『奈良史学』14，1996 年，61 頁～ 75 頁を参照。

参考文献

1　『京都の歴史』全 10 巻　學藝書林（1968 ～ 1976）
2　『史料京都の歴史』全 16 巻　平凡社（1979 ～ 1994）
3　『京都市の地名』　平凡社（1979）
4　脇田晴子（1981）『中世都市論』　東京大学出版会
5　髙橋康夫（1983）『京都中世都市史研究』　思文閣出版
6　髙橋康夫（1988）『洛中洛外―環境文化の中世史』　平凡社
7　髙橋康夫・宮本雅明・伊藤毅・吉田伸之編（1993）『図集・日本都市史』　東京大学出版会
8　髙橋康夫（2001）『京町家・千年のあゆみ―京都にいきづく住まいの原型』　学芸出版社
9　河内将芳（2000）『中世京都の民衆と社会』　思文閣出版
10　日本史研究会編（2001）『豊臣秀吉と京都―聚楽第・御土居と伏見城』　文理閣
11　大村拓生（2006）『中世京都首都論』　吉川弘文館
12　髙橋康夫編（2006）『中世のなかの「京都」―中世都市研究 12』　新人物往来社
13　金田章裕編（2007）『平安京―京都　都市図と都市構造』　京都大学学術出版会
14　杉森哲也（2008）『近世京都の都市と社会』　東京大学出版会
15　堀内明博（2009）『日本古代都市史研究―古代王権の展開と変容』　思文閣出版
16　山田邦和（2009）『京都都市史の研究』　吉川弘文館